うとする道真の姿勢が描かれている」（注４）（四〇頁）

もしくは「延喜開元の世界から除外された絶望と最後まで天子に忠節を尽くすという信念は、太宰府時代の〈元年立春〉詩にある天下の春と、我が身の冬とを通じて描き出された」（注４）（四一頁）

と言及されるような訓みがなされて来た作品と看做して良いと思う。

筆者は本稿でここに一つの新たな訓みを提起するのが、主旨である。

まず、「㊀『**菅家文草**』〈278　**立春**　**在十二月廿六日**〉**との比較を通して見えてくるもの**」の考察に移りたい。

原詩と訓を以下に引く。

278　立春　在十二月廿六日

偏因暦注覺春來　偏に　暦注に因りて　春の來たるを覺る

物色人心尚冷灰　物色と人心　尚冷灰たり

誣告浪從氷下動　誣告す　浪は　氷下より動くことを

暗思花在雪中開　暗思す　花は　雪中に在りて開くことを

浮雲自後寒応暖*　浮雲　自後　寒さ応に暖かなるべし

壯日如今去不廻　壯日　如今　去りて廻らず